日本歯科医史学会々誌・第27巻
第1号通巻102号・平成19年3月

舌出しと尻出し[*1]

竹　原　直　道[*2]

要旨：舌出し図像は世界中に分布している．そこでこれらの舌出し図像や神話の持つ意味について分析を試みた．その結果，威嚇や侮辱の表現である張目吐舌は，尻出しとともに，初期農耕社会の戦場での挑発的戦闘行動であり，戦意高揚のために用いられたしぐさであることを考察した．

Key Words：舌出し A tongue sticking out，尻出し Mooning，女神 Goddess，神話 Myth，巫女 Medium

まえがき

筆者は地獄絵に描かれた抜舌に興味を持ってきたが[1,2]，そのなかで舌出しディスプレイをモチーフとした絵画や彫刻，仮面などが多数存在することを知った．これらの舌出し図像の持つ意味を解明することは興味深い．

舌出しは，目を大きく見開いた張目とセットで表現されることが多い．この「張目吐舌」＝いわゆるあっかんべーの表情が，威嚇や侮辱の意味を持つことはよく知られている．しかしそれは子どもの喧嘩のレベルの話だけではない．初期農耕社会からクニが成立する過程で，村同士の争いにおいて用いられた，戦争の作法の一つでもあった．本稿では，古代の戦場における張目，吐舌および尻出しの例を収集すると共に，初期農耕社会の戦争形態の一つである先駆（さきはらひ，またはさちばえ）巫女＝軍を先導する巫女，の事例にも検討を加えたい．

なお本稿では「先駆巫女」という言葉を使うが，この言葉が適当かどうか分らない．従軍巫女という用語も考えたが，これだと軍に付き従う意味になるので更に不正確である．先軍巫女あるいは初め軍（はじめいくさ）巫女の方がいいのかも知れないが，取り敢えず用いることにする．

また戦場での尻出し事例についても検討するが，本来尻出しと，前向きの性器出しとは別な意味を持つものである．峻別して検討すべきだが，ここでは敢えて一纏めに「尻出し」として取り扱う．

1．古代の先駆巫女事例の検討

1）イザナミとヨモツシコメ

『古事記』[3]には死んだイザナミが，訪ねて来た夫イザナギに蛆が湧いた体を見られて怒り，黄泉の国の巫女，ヨモツシコメ（複数）にイザナギを追わせる記述がある．イザナギの追跡に失敗したイザナミは，更に1500（多勢の意）の黄泉軍に追撃させる．一種の夫婦喧嘩がここに来て何故戦争になるのか分らないが，1500も軍を動員すればもう立派な戦争だろう．最後はイザナミ自ら軍を率いて追撃戦を挑む．この様子は先駆巫女が軍を率いて戦う様を象徴的に示している．

2）アメノウズメとサルタヒコ

アメノウズメは，アマテラスが天の岩戸に隠れて世界が闇くなった時，覆せた桶の上で乳や陰部

*1 A tongue sticking out and mooning

*2 Tadamichi TAKEHARA, Kyusyu Dental College, Division of Community Oral Health Science　九州歯科大学保健医療フロンティア科学分野

を出して踊り，アマテラスを岩戸から引き出すのに働いた巫女として知られる．

一方，『日本書紀』[4]には，ニニギが葦原の瑞穂の国を攻めた時，敵のサルタヒコの眼力に対して，アメノウズメが乳と陰部を出してあざ笑う奇策によって，これを破るという記述がある．古代の戦場における緒戦の睨み合いの様子を活写している．ニニギは，アマテラスの孫にあたるので，アメノウズメは個人名ではなく，巫女団の名であることが分る．

ここで興味深いのはサルタヒコである．『日本書紀』は珍しくサルタヒコの姿を詳しく説明している．「一の神有りて，天八達之衢（あめのやちまた）に居り．其の鼻の長さ七咫（あた），背の長さ七尺余り．当に七尋（ひろ）と言ふべし．且口尻明（あか）り耀（て）れり．眼は八咫鏡（やたのかがみ）の如くして，赩然（てりかがやけること）赤酸醤（あかかがち）に似れり．」とある．ここに示された長さの単位は現在とは異ろうが，咫は古語辞典の一説によると中指と人差し指の間の距離とあるので，3〜4 cm，1尺は約 30.3 cm，尺と咫の関係を 10 進法とすると，ほぼ辻褄が合う．ただ1尋は約 5〜6 尺なので，この部分が合わない．尋を除けば，身長 2.1 m ぐらい，鼻の長さは 21 cm，目はホウヅキの実大である[5]．身長は通常の男子の 1.3 倍ぐらいだから相当大きいといえる．サルタヒコに詳しい鎌田東二氏[6]によるとサルタヒコの長い鼻は巨大な男根に準えられるという．そうなるとサルタヒコの陰茎は約 21 cm ということになる．日本人男子の平均より大分長いが，身長とは調和しているといえよう．次に筆者は「口尻明り耀れり」の部分に注目したい．口尻は辞書を引くと唇の両端とあるが，「唇の端が赤く照り輝いている」ではどういうことか訳が分らない．尻には下部，底部という意味があるから，口尻は「口の下」と考えるべきだろう[7]．そうすると口の下が赤く耀っているとは吐舌の意味であることに思い至る．すなわちサルタヒコはここで戦いの表情，「張目吐舌」をしているのである．そう考えて始めて眼が八咫の鏡のように輝り，ホウヅキの様に赤いという意味が取れる．実際，後世のサルタヒコの神楽面には張目吐舌したものが見られる[8]．

『日本書紀』はニニギ軍が「皆目勝ちて相問ふこと得ず」と記す．つまり緒戦の睨み合いでサルタヒコに勝つことができない．そこでアメノウズメは「汝は是，目人に勝ちたる者なり．往きて問ふべし」と命ぜられる．しかし目ではサルタヒコにどうしても勝てないアメノウズメは，最後の手段として「其の胸乳を露にかきいでて，裳帯を臍（ほそ）の下に抑（おした）れて，咲噱（あざわら）ひて向きて立つ．」こと，いわゆる尻出しによって勝つことができた．

ちなみにアメノウズメは渦女というよりも渦目だろう．目の廻りに入墨を入れて凶眼を強調していたのではなかろうか．話は違うが，埴輪の人物像には朱丹粧をしたものが多い．しかし朱丹粧では張目を強調したことにならないから，アメノウズメが入墨を入れていた可能性は否定できないと思う．

ここでもう一つ，サルタヒコの長い鼻についても考えてみたい．『人物・動物はにわ』[9]を眺めていたら，裸の女性像や男根を勃起した像があった．筆者は埴輪が，王や豪族の日常生活の再現を企図したというよりは，墳墓の防衛を目的としたと考える．埴輪にみられる力士の裸や，性器の露出は外敵に対する威嚇であろう．サルタヒコの長い鼻が男根のメタファーであるとすれば，男根を露出させることは古代の戦場における示威的戦闘行動の一つであったろう．裸の力士も決して今日的意味で相撲を取っている訳ではない．サルタヒコの陰部出しは「さあ懸かってこい」という戦場での挑発的メッセージなのである．しかもこのサルタヒコの挑発は，アメノウズメの尻出しによって簡単に打破られている．古代の戦場カルタではクイーンの方がキングより強かったようだ．

サルタヒコの陰部出しが戦場での威嚇行動である証拠の一つが，筑紫の君磐井の墓といわれる福岡県岩戸山古墳から出土した石人像である．岩戸山古墳は廻りを武装した石人像で囲まれていたが，その一つに男根を勃起させた石人がある．「筑後国風土記逸文」は，この男根石人を偸人（ぬすびと）とするが，偸人に墓守をさせる訳がないから，これは尻出しの意味が分らなくなった，200 年後の平和な奈良朝役人の誤解だろう．やはりこの石人は戦場での尻出しの一例であろう．山上伊豆母氏はサルタヒコを「男巫」としている[10]．

ついでにいうと，サルタヒコがニニギを待ちうけた天八達之衢（あまのやちまた）は，分れ道す

なわち村またはクニの境のことである．川村邦光氏は韓国の村境の神像，チャンスンを紹介しておられるが[11]，このチャンスンは吐舌はないものの強く張目している．しかもチャンスン自体，勃起した男根そのものの姿である．サルタヒコとチャンスンとは村境の守り神として同根のものなのであろう．世界中でみられる勃起男根状石柱も，豊饒を祈るシンボルではなく，戦争のシンボルなのだ．

3）アマノサグメ

『日本書紀』巻第2にでてくるアマノサグメ（天探女）は大系本補注によると，後世民話のアマノジャクに転じたものとしている．同注はこのアマノサグメが「さしでがましいもの．干渉好きの人．おしゃべり屋」の意があるとする．アマノサグメが古代の戦場で先駆巫女の役割，すなわち敵への悪口雑言，呪詛の言葉を吐くという任務を持っていたことを伺わせる．アマノジャクはこの先駆巫女の成れの果ての姿であろう．

4）シタテルヒメ

記紀にはオオクニヌシの娘とされる下照姫が登場する．シタテルはアマテルに対応した国津神系の名称とされるが，シタは舌と音が同じである．下照が舌照だという可能性はないのだろうか．なぜか大系本『日本書紀』の注には「シタ」は赤い色とある．どうしてシタが赤い色なのか訳が分らないが，このシタが「舌」だと話があう[12]．更に下には陰部という意味もあるというからなにか訳がありそうだ．また『日本書記』巻第4には孝霊天皇の后に真舌媛の名がみえる．その父の名が大目というのも興味深い．

5）イツヒメ

『日本書紀』巻3には，ヒコホホデミ＝カムヤマトイハレヒコがヤマトの国を攻める時，イツヒメ（厳媛）を斎主として斎を行う場面がある．このイツヒメは元の名をヒノオミ（日臣），改名してミチノオミといい，オホクメ（大来目）の軍の督将（いくさのきみ）として活躍している．つまり実際に戦争をするのは来目の兵士らで，ヒノオミは督軍の将，もっといえば先駆巫女の役割を果たしていた．大系本の注は，このヒノオミを当然の如く男性とし，斎祀する時にあたって，斎主は女性の役であったから，ヒノオミは男だったけれどもイツヒメと号したとする．紀を引用すると「汝を用て斎主として，授くるに厳媛の号を以てせむ」とある．ヒノオミは本当に男性だったのだろうか．ヒノオミは神武天皇と同様に本名ではなく，しかも固有名詞でもなさそうだ．ヒノオミのヒは日の事だから，ヒノオミは，最高位巫女アマテラス＝既に神になっている，の巫女団を擁する一族＝大伴氏の祖先，に属する巫女だったのではなかろうか．

その斎祀を行ったのは厳しい行軍の陣中であった．最高位の王族の女性であるべき斎王のヒメは生憎いない．そこで斎主権はないが高級先駆巫女の一人であるヒノオミを代役にたて，「厳媛」と王族の女性を示す「媛」の号をつけて斎をしよう，ともとれるではないか．斎主＝後の斎王は，タカミムスヒ神の妻の役であるから，斎主を男が演じたのでは様にならない．ここではどうしても斎主は女性である必要があると思う．断定的なことはいえないが，取り敢えず疑問の一つとしておこう．

6）トベ

『日本書紀』巻第3にはヤマトの国を攻めるヒコホホデミに抵抗する，女性に率いられたムラ（邑）の記載がある．邑を率いる女性は戸畔（トベ：戸女，トメ）と呼ばれていた．名草戸畔，丹敷戸畔，新城戸畔などという．彼女らはすべてヒコホホデミの掃討戦で誅（ころ）されてしまうが，この戸畔もムラを率いる女首長＝先駆巫女であろう．

7）オオクメとホトタタライスズヒメ

『古事記』によるとカムヤマトイハレヒコがヤマトの国のイスケヨリヒメに求婚するため，オオクメを使いとして派遣した時のこと．イスケヨリヒメはオオクメの目の廻りの入墨を見て，「どうして入墨をした鋭い目をしているのか」尋ねる．オオクメは「あなたに会おうとして入墨をした目をしているのです」と答える．この入墨は張目を強調するため，あるいは敵の邪視に勝つための「辟邪視」として入れたものである．大久米は大久目だろう．この話から以下の2点が明らかとなる．一つはオオクメが張目の入墨を入れた職業軍人であること．次にこの目の廻りの入墨はイスケヨリヒメが不思議がっているように，ヤマトでは一般的なものではなかったことである．このことからカムヤマトイハレヒコ軍が職業的軍事集団であったのに対し，迎え撃つヤマト側は，カムヤマトイハレヒコ軍の軍事レベルに達していなかったことが分る．

ちなみにこのイスケヨリヒメはまたの名をホトタタライススキヒメという．『日本書紀』はヒメタタライスズヒメとの別名をあげている．ヤマトの国津神，事代主神の子であるという．ヒメは元々ホトだった．ホトは女陰のこと，タタラは製鉄のためのふいごのこと，イ（五十）はたくさんの意味，スズは巫女のもつ鈴のことだから素直に読めば，「ふいごのような女陰を持つ姫巫女」ということになる[13]．これは古代ケルトの女神シーラ・ナ・ギグを髣髴とさせる名ではなかろうか．

8）シーラ・ナ・ギグ

シーラ・ナ・ギグは狂暴な破壊の神で，インドのカーリー神のような存在であるらしい．太母神というよりは，むしろ戦場の巫女だろう．『ミステリアス・ケルト』[14]に紹介されているシーラ・ナ・ギグ石像は吐舌していないが，張目と尻出しをしている．張目するシーラ・ナ・ギグは舌出しのかわりに唇を歪めてあざ笑っている．また12世紀作の別のシーラ・ナ・ギグ像には舌出しをしているものもある[15]．このシーラ・ナ・ギグ像で強調されているのは，女陰一般というより陰唇である．大和岩雄氏はその著書[15]で，「陰唇の呪力は，入れて出す口の呪力だから，開いていなくては意味がない．」と述べている．この陰唇の「開け拡げ」こそホトタタライスズヒメのたたら＝ふいご（開いたり閉じたりする），の表現ではなかろうか．

古代ケルトの戦場では，男が裸で戦うことも多かったようで『ミステリアス・ケルト』には，セーン・アッバスの巨人のように手に棍棒を持ち，勃起した男根が描かれたもの（前1世紀）や，裸で槍を投げるケルト戦士(前3世紀)，全裸で全身に入墨をしたピクト人の想像図（1590年）などがあり，興味深い．入墨をしたピクト人は15世紀フランスの細密画に同様の図柄があり（「舌出し獣面考」[16]），顔は仮面かと思われる．こちらの方は舌出しもしている．このように古代ケルトの戦場では，男女ともに張目，舌出し，尻出しと三拍子揃った，挑発的戦闘行動がとられていたのである．

9）おもろそうし

古代の事例ではないが，16世紀に成立したといわれる琉球の『おもろそうし』[17]に戦さの先頭に立つ巫女の記述がある．「聞得大君（きこえおおきみ：最高位の巫女）が戦さの先頭に立って敵を平らげ給う」とあり，琉球の巫女は呪詛と罵言によって敵を調伏させる役割をはたしていた．高梨一美氏によると，琉球の歴史書『中山世譜』巻6に1500年，八重山のオヤケアカハチの叛乱鎮圧に出兵した首里軍に対し，（八重山軍は）「又，婦女数十人をして，各，枝葉を持ち，天に号し地を呼りて，万般呪罵せむ．」との記述があるという（筆者未見：慶応大学地域研シンポジウム2001/10/20による）．これに対し遠征した首里軍も，久米島の君南風（きみはえ）という巫女が先駆を勤めた．このように琉球では近世に到るまで先駆巫女団が活躍していた．当然薩摩の侵攻に対しても先駆巫女団は先頭に立って闘ったが，残念なことに巫女軍は役に立たず，前坊主（ちょんまげ）の薩摩軍に鉄砲を打ち掛けられると，一溜まりもなく敗走してしまったらしい[18]．

10）埴輪の巫女像

埴輪は古墳時代に入って5世紀頃から墓の周囲に埋められるようになった．その人物像を見ると圧倒的に男は武人像，女は巫女像が多い．これは埴輪が，王の生前の生活の再現や，殯の儀礼のためというよりも，墓を守るという呪術的意味を持って作られた事を示す．王墓は巫女を含む武装軍団によって守られているのである．**表**に『人物・動物はにわ』[9]から埴輪の女性像を分類した例を示す．全女性像に対する巫女像の比率は，この例で57.7%である．巫女の比率が異常に高い．そのなかに足首まで表現された埴輪が3体ある．この数は多いとはいえないが，すべて巫女で，なおかつ裳（ロングスカート）の着用が確認できない．3体とも首飾り，腕飾り，足飾りをしている．他の書は調べていないが，一般人の女子は足飾りをしていないので，この例で見る限り，足飾りにもなんらかの意味があるのだろう．しかもこの3例の巫女の上着（ワンピース）は短かく，その丈は膝あたりである．裳を履いていては激しい仕事はできないから，この3体の巫女は，踊り（もちろん呪術的な）を仕事にしていた可能性は高いといえるだろう．戦場においては職能的に先駆巫女の役割を果たしていたのではなかろうか．

また同書[9]には，群馬県観音山古墳出土の「連座の女」と呼ばれる三人の巫女像（6世紀後半）がある．この三人の巫女は背に小さな鏡（鈴はついていない）を2枚づつ背負っている．鏡は一般的に神器として，眞賢木に掛けて使うはずなのに，な

表　埴輪にみる巫女像※1

通し番号	図の番号※1	出土地	作像の範囲※2	足首	裳	鏡・ポシェット	巫女	備考
1	1	群馬 塚廻り3号墳	全身	○		○	○	腰かける
2	2	群馬 上芝古墳	腰下				○	
3	3	群馬 観音山古墳	全身		○		○	座る
4	4	群馬 塚廻り4号墳	腰下				○	
5	9	群馬 塚廻り4号墳	腰下			○		
6	31	大阪 蕃上山古墳	膝				○	
7	34	奈良 勢野茶臼山古墳	膝				○	
8	35	大阪 長原87号墳	腰下				○	
9	36	京都 塩谷5号墳	足首上		○		○	
10	37	滋賀 狐塚5号墳	腰下				○	弓をもつ
11	38	三重 常光坊谷4号墳	膝		○		○	
12	40	群馬 古海所在古墳	全身	○		○	○	椅子に腰かける
13	41	埼玉 生出塚埴輪窯跡	腰下			○	○	
14	番外	埼玉 三千塚	全身	○		○	○	
15	45	石川 エジリ古墳	腰下				○	
16	64	群馬 塚廻り4号墳	腰下					陪膳の女子
17	65	栃木 飯塚31号墳	腰下					
18	66	宮城 丸森町103号墳	腰下					
19	69	茨城 那珂町	腰下					
20	70	群馬 観音山古墳	腰下					
21	86	千葉 経僧塚古墳	腰下		○			
22	87	群馬 伊勢崎市	足首上		○			貴婦人
23	120	埼玉 瓦塚古墳	腰下					
24	123	福島 丸塚古墳	腰下				○	
25	125	栃木 鶏塚古墳	膝				?	全裸
26	127	栃木 鶏塚古墳	腰下					子を背負う

※1：『日本の美術 No. 346 人物・動物はにわ』による　※2：破壊によって紛失したものも含む

ぜこの巫女らは小さな携帯用の鏡を下げているのか．この小鏡はほかの巫女像にも造形されており，**表**に示すように，5体の巫女埴輪が鈴鏡あるいは鏡が入っていると思われるポシェットを持っている．鏡は裏面のみが注目されているが，この小鏡はひょっとしたら戦場で，武器として使われた可能性もあるのではなかろうか．当時北関東のあたりは蝦夷との戦いの最前線だった．銅鏡とはいえ，矢戦中心の戦場で鏡の役割は，晴れてさえいれば，決して小さくなかったかも知れない．

話が脱線してしまった．本稿のテーマである張目吐舌に戻ろう．不思議なことに筆者の知る限り，埴輪の人物像には一例も張目吐舌を見い出すことはできない．埴輪の時代には戦争の武器としての張目吐舌の役割は，既に終っていたのだろうか．一方埴輪の巫女の陰部出しはかなり例が多い．川村邦光氏は『ヒミコの系譜と祭祀』[11]のなかで，埴輪の巫女像について特に一章を設けて考察しておられるが，氏が写真入りで紹介している分だけで，陰部出しの巫女像は5例あるから，相当多いといえるだろう．

それにしても埴輪の巫女の表情はあくまでも穏

やかである．それは浄瑠璃人形の「がぶ」のようにある日突然目を剝き，口が裂けることになるのだろうか．最近福岡県前原市の銭瓶塚（ぜにがめづか）古墳から，大きく口を開けて威嚇の表情をした，5世紀の岩偶が出土した．墓を守る魔除けとみられている．この岩偶は埴輪と同じ役割をはたしていたらしい．5世紀以後の埴輪の時代においても，張目吐舌は戦場の武器としての威力をまだ失ってはいなかったのだ．

11）ゴルゴンとメドゥーサ

ゴルゴンはギリシャ神話にでてくる三姉妹の怪物で，末娘がメドゥーサである．メドゥーサは凶眼を持つことで知られる．この凶眼は見られたものを石に変えてしまうというから恐ろしい．メドゥーサの図像は，山本忠尚氏の「舌出し獣面考」[16]に多数の実例とともに紹介されており，筆者如きが付け加えることはなにもないので参照されたい．松平俊久氏の『図説ヨーロッパ怪物文化誌辞典』[19]にはゴルゴン3姉妹の一人，エウリュアレの図像も紹介されている．その紀元前5世紀作の図を見ると，エウリュアレも舌出しをしている．ゴルゴン姉妹は「張目吐舌」の巫女団ではなかろうか．よく見るとスカートは膝丈で，足首には足飾りをしている．ゴルゴンはその強い凶眼と舌出しという共通の符号によって，初期ギリシャにおける先駆巫女団であった可能性が高い．

ここでもう一つゴルゴン像をみておきたい．それはエーリッヒ・ノイマンが『意識の起源史』[20]のなかで紹介しているもので「舌出し獣面考」[16]にも図示されている．それは紀元前6世紀のエトルリアの浮彫であるが，張目吐舌したうえに陰部出しの姿勢をとっている．この凶暴なゴルゴンは，張目，吐舌，尻出しという三拍子揃った強烈なメッセージを発していて，しかも片手づつライオンを2頭絞め殺している．

実はノイマンが太母神というゴルゴン像[16,20]は，どこかの神殿の祭壇に祀られている訳ではない．それは戦車の飾りとして付けられているのだ．アテナの楯を飾るメドゥーサ像も武器の飾りである．メドゥーサ像はいずれも武器や破風，扉，胸飾りの“魔除け”として用いられている[16]．太母神として祀られている訳ではない．このことを論ずると，神話に関するユング説の考察が必要になるが，筆者の能力を超えているので深入りすることは避けたい．

更に紀元前7世紀作，シシリー出土のメドゥーサ像[16,21]も，典型的な張目吐舌の形相をしており，腰回りにショートパンツかミニスカート様のものを巻き，足に飾りのついた半長靴を履いて，駆けている．

この駆けるメドゥーサの造形は尻出しよりはるかに多い．メドゥーサがどこへ駆けているかというと，もちろん戦場である．ところでロジェ・カイヨワはメドゥーサの張目吐舌の顔を「仮面以外のなにものでもない．」[22]と断定している．メドゥーサの顔は仮面なのか．筆者は仮面の可能性も捨てきれないが，やはり仮面ではないと考える．後世メドゥーサが登場する劇や，祭りで仮面は使われただろう．しかしなによりもメドゥーサは戦場の巫女なのであって，その主要な役割は敵への悪口と呪詛である．形相はもちろん大切だが，言葉が第一なのだ．仮面では言葉は語れない．その傍証の一つが我が国にある．熊本県菊水町のトンカラリンに近い，前原長溝遺跡および松坂遺跡から坂田邦洋氏らによって発掘された，頭部を人工的に変形させられた巫女と思われる4体の人骨である．この頭骨の変形は非常に歪で，その形相は見るも恐ろしいものであるらしい（インターネット情報による）．この巫女の果たす役割が，単なる祭司でなく，戦場での敵への威嚇と，恐怖心を引き起こすものであったろうことが推測できる．もし恐ろしい形相を仮面ですますことができるなら，このような変形は必要がない．弥生時代のクニとクニとの戦いが，実に長期にわたり，しかも頭部に人工的変形を必要とする程に，戦場巫女の役割が職業化，専門化していた事を示す．頭部の人工的変形は幼児期に始めなければできないからだ．そう考えるとヨモツシコメ（醜女）も，本当に顔まで醜く変形させられた巫女団であったかも知れない．

12）イワナガヒメ

ここで興味深いのは，ニニギの妻となったコノハナノサクヤヒメの姉，イワナガヒメである．ニニギの求婚に対してコノハナノサクヤヒメの父，オオヤマツミは姉イワナガヒメとセットでニニギと結婚させるが，ニニギはイワナガヒメが「いと醜」いので返してしまう．この頃王族の結婚は，呪力を持つ巫女団（姉妹が多い）をそのまま譲り

受けるという意味があったから，ニニギの行動はルール違反ととられ，ニニギは呪いを受けてしまう．この姉妹の巫女団がワンセットになっているという仕組みは琉球のおなり神や，ゴルゴン姉妹と類似性を持っている．想像だが，イワナガヒメは役割分担によって顔貌を変形させられていたかも知れない．

13）アテナ

アテナは鎧をまとってゼウスの頭から生まれたという．全身武装したアテナは先駆巫女としてのイメージそのものだ．アテナの楯の飾りが張目吐舌するメドゥーサの首であるのも象徴的である．アテナは都市国家アテナイの守護神だから，アテナイ存亡の時には，アテナはアテナイ防衛軍の先頭に立って戦うシンボルなのである．つまりアテナはアテナイ軍の最高位先駆巫女から脱却して神へと昇りつめ，一方同じ先駆巫女でありながらゴルゴン姉妹は，神と成り損なって楯の飾りとなってしまった．そして図らずもアテナイ防衛という同じ役割を荷っているのである．

ここで注意が必要なのは，アテナがアテナイ国家固有のシンボルであるのに対し，メドゥーサはそうではないということである．メドゥーサらゴルゴン姉妹の造形物は，ギリシャを中心とした各地から出土するとともに，さらに広くアーリア人世界全体に拡がっていた．あるいはインドのカーリー神さえもメドゥーサの亜種である可能性もある[23]．もっといえば張目，吐舌，尻出しした造形物を一絡げにして，メドゥーサと呼んでいいのかどうかも分らない．そしてアテナイ国家創成期にメドゥーサのような先駆巫女団が存在したとしても，アテナイは非常に早い時期から初期農耕社会の状態を脱却し，市民＝貴族化した常備軍，が戦争の主力となっていたと考えられ，歴史時代に入ったアテナイ自体は既に極端な男性優位社会であったらしい[24]．先駆巫女であるアテナの神格化と，メドゥーサの凋落には長い年月がかかっているのである．

14）アマテラス

この武装せるアテナと同様の，武装せる女神がアマテラスである．『古事記』には，スサノオが高天原に来ると聞いたアマテラスが，これに対抗するため急拠男装し，完全武装してスサノオに対面する場面が描かれている．アテナは兜を被っているのに対し，アマテラスは髪をみずらにまき，「男建（おたけび）蹈み建びて」と，呼び且つ地団駄を踏んで迎えている．アマテラスの恐ろしい様子が手に取るような表現だ．アマテラスもアテナ同様，最高位巫女が女神化した例といえる．ついでにいうと白馬で戦場を駆け抜ける北欧神話のヴァルキューレも女神化した先駆巫女だろう．

15）ヒミコとトヨ

『魏志倭人伝』[25]に登場するヒミコもトヨも巫女であることは間違いないが，『倭人伝』には彼女らが軍の先頭に立って戦ったという記述はない．しかし彼女らは女王というより，先駆巫女団を率いた最高位巫女だったと思われる．『おもろ』に出てくる「聞得大君」が彼女らのイメージと重なる．ヒミコの時代，日本はクニどうしの戦争で，先駆巫女の存在が軍人以上に重要であったに違いない．実は弥生時代末期から前期古墳時代の支配層の女性の墳墓からは，副葬品として甲冑などの武具は出土していない．このことをもって，この頃の巫女がクニの支配層のなかで軍事的指揮権を持たず，戦争においても巫女が重要な役割を果していなかった，とする見解がある．しかし元々先駆巫女に軍人としての働きが期待されようはずもないから，武具が出なかったからといって不思議でもなんでもない．そもそも役割が違うのである．

一方ヒミコやトヨがただの巫女であって，とても女王と呼べるような存在ではなかった，とする見方もある．だがむしろヒミコの時代，クニの支配層は役割分担はあったろうが，男女ともに支配層丸ごと巫覡であったと考える方がよいのかも知れない．もしヒミコが女王と呼べないのなら，男王もただの覡であって王とは呼べない存在ではなかったか．

話は変わるが，記紀の世界は，神族によるある種の共和体制であった．なにしろ記紀の編者らは自らを神々の末裔と認識している．『日本書紀』の巻第2から一例だけ引用しておこう．霊として存在するタカミムスヒの神は「(ニニギノミコト)を立てて，葦原中国（あしはらのなかつくに）の主とせむと欲す．然（しか）も彼の地（くに）に，多（さは）に蛍火の光（かかや）く神，及び蠅声（さばへな）す邪（あ）しき神有り．復（また）草木咸（ことごとく）に能く言語（ものいふこと）有り．」．つまり『日本書紀』の筆者らは，自らの

祖先を神族とし，従わない敵の支配層をも神族としているのである．一方支配層以外は草木に例えられている．ここで神々はギリシャ神話の神々と同じく，常備軍を構成する貴族的支配層のことである．『魏志倭人伝』はこの神族のことを中国風に「大人」と呼んでいる．

16）男軍，女軍

『日本書紀』巻第三にはヒコホホデミのヤマト征服の時，エシキ軍との戦いにおいて，シイネツヒコの「今は先づ我が女軍（めいくさ）を遣して，忍坂の道より出でむ．虜見（あたみ）て必ず鋭を尽して赴かむ．吾は勁（つよ）き卒を駈馳（は）せて，直に墨坂を指して，……にはかの間に，其の不意に出でば，破れむこと必じ」という献策に従って，「果して男軍（をいくさ）を以て墨坂を越えて，後より夾み撃ちて破」る，というエピソードがある．この記述から当時，軍の主力部隊は必ず先駆巫女団が率いていたことが分る．だからこそエシキ軍は，女軍をヒコホホデミ軍の主力と見誤ったのである．その一方で，ヒコホホデミ軍は先駆巫女がいない男軍をも駆使しており，先駆巫女に頼る古来の戦術を脱却して，男だけの職業軍人中心の部隊編成を行っており，その軍事戦略が既にヤマト軍の水準を超えていたことを示す．

17）アマゾン

騎馬民族スキタイの伝説の女族アマゾンは有名だが，これも女性が戦士として戦うという形態からみて，これまでみてきた戦う巫女軍団の姿を誇張して伝えたものであろう．馬に乗ったスキタイ人はギリシャ神話のなかで，半人半馬のケンタウロスとしてもイメージされていた．興味深いことに最も古い（紀元前7世紀）メドゥーサ像は半人馬体のケンタウロスとして造形されており[16,21]，アマゾン，メドゥーサ，ケンタウロスというギリシャ神話周辺領域のシンボル，の出自が推定できよう．すなわちアマゾンもアーリア人世界のメドゥーサも同じ騎馬民族の女性戦士だったのではなかろうか．その後造形されたメドゥーサ像に馬（ペガサス）をかかえたモチーフが多いのもその辺の関係を伺わせる．アマゾンがギリシャ人にとって珍しかったのは，早くから常備軍化したギリシャ都市国家人に対して，男女共に戦争に参加するというスキタイ人の戦闘形態の違いによるものであろう．

同様に南アメリカ，アマゾン川の名称の起こりも，同地の原住民の先頭に女性が立って戦うのをみて名付けられたというから，アマゾン川流域の原住民の戦いには村の巫女が先駆を勤めていたことが知れる．

その戦う姿は，スペイン人のガスパール・デ・カルバハル神父のレポートによると「……10人ないし12人のアマゾンがやってきていて，指揮官のように，インディオたちの先頭に立って戦っていた．その戦いぶりはなんとも勇猛果敢なため，インディオたちは向きを変えて逃げることができなかった．逃げ出そうものなら，我々の面前でその者を叩き殺したのである……．」とある[26]．先駆巫女の面目躍如である．

18）インカとアステカの巫女

インカ，アステカ，マヤに多数の舌出し図像があることはよく知られている．しかしそれらの図像に本稿で考察している先駆巫女のものがあるかどうかは必ずしも明瞭ではない．

山本氏もアメリカ大陸の舌出し像はメドゥーサなどとは，別な意味があるのではないかと推測している[16]．例えばアステカの英雄ウィツィロポチトリと闘って殺された，妹のコヨルシャウキの石像は舌出ししている[27]．しかしコヨルシャウキは手足をバラバラにされており，彼女の舌出しは威嚇でなく死体であることの表象であろう．ただイーグルハート[28]が紹介している，メキシコのベラクルス州で発見された，ショチケツァル神の巫女とされる「笑う女神」像も舌出しをしている．この巫女像は，戦場の巫女かどうかは不明だが，笑うというより呪阻している可能性はある．クニのレベルに達していない北米クワキウトル族には張目吐舌する男のクウェクウェ仮面がある[29]ことから，張目吐舌自体は新大陸においても，旧世界と共通の普遍的意味＝威嚇と侮辱，を持っていたことに間違いはない．

19）Vagina Dentata

金関丈夫の『木馬と石牛』[30]の一節 Vagina Dentata は，女性の陰部に歯があるという台湾高山族の民話を考察した興味深い論文である．このなかに尻出しに関係したものがないか捜した．陰歯，人工的欠歯，うつぼ船の話など興味深いが，残念ながら尻出しに関係したものは見当たらなかった．ところが「追記」に Elwin Verrier の著

書からの引用として「パプアのキワイ族では女陰の霊力が強く，戦場に出る男がその前夜女陰の夢を見るさえ危険だという.」とある．この記述から2つの事が分る．一つは戦争があらかじめ約束された日時と場所で行われていたこと．二つ目に，その戦場では尻出しが行われていたことである．女陰に辟邪の力があるという考え方の起源はこの戦場での尻出しであろう．当然，張目吐舌，悪口，呪詛は行われていた．パプアニューギニアには張目吐舌する顔を全面に描いた楯も残されている．レヴィ・ストロースが『構造人類学』[31]に紹介する舌出しのマオリ戦士はいずれも威嚇，侮辱の戦闘行動としての舌出しである．しかしそれは相手のマナ（霊力）に対する畏れの表情から転じて，尊敬の意味も含まれるというから複雑だ．またマオリ族の村同士の戦争において，先駆巫女団は動員されなかったようだ．

2．先駆巫女の系譜

これまで初期農耕社会の戦場で活躍した，先駆巫女団についてみてきた．歴史時代には戦場の巫女団は滅んだと思われるが，その残党ないし後継者はいないのだろうか．現代に到る先駆巫女の系譜について不十分ながら考察を試みる．

1）上毛野君形名の妻

『日本書紀』巻第23に記載された上毛野君形名（かみつけのきみかたな）の妻の場合，典型的な先駆巫女という訳にはいかない．蝦夷（えみし）の叛乱軍に包囲された形名は，その妻ら数十人の女性が，弓の弦（つる）を鳴して，多数の兵がいると思わせることによって包囲を解かせた．この間，妻は夫の剣を佩（は）き，叱咤して，先祖は「蒼海（あをうなはら）を渡り，万里を」股にかけて戦ってきたのにここで負けたら後世の恥だ，と夫を罵っている．この形名の妻は，職業軍人の妻ではあっても，先駆巫女とはいい難い．しかしその気概たるや先駆巫女の系譜に属するといってよい．

2）那須与一と扇の的

『平家物語』[32]屋島の合戦の時，海上の軍船から那須与一に扇の的を撃ってみろ，と挑発した平家軍の女官は，挑発・悪口を業とする巫女を髣髴とさせる．もし与一の矢が当たらなかった場合，平家軍の意気は大いにあがっただろう事を考えると，この女官の役割は戦場の巫女である．

山上伊豆母氏は『巫女の歴史』[10]において源義経の母とされる常磐御前や，愛人静御前ら白拍子＝遊女出身者を，巫女の末裔の芸巫であるとしている．彼女らが軍の先頭に立って活躍する場面は『平家物語』にはないが，最後まで木曽義仲とともに戦場を駆け抜けた巴御前の場合は，先駆巫女の系譜といってよいだろう．

3）島原の乱

「島原の乱図」[33]という，島原の乱を描いた屏風絵がある．そこに1638年，原城に立籠ったキリシタン一揆軍が，幕府軍の総攻撃によって，いよいよ最後の時を迎えるシーンが描かれている．ハイライトは石垣をよじ登る幕軍に城壁の上から，石臼を投げ落す白髪の老女．老女は白い肌着一枚を腰紐で締めただけという姿である．悲壮感漂う場面．この最後の2日間の戦闘で，一揆軍2万は一人残らず皆殺しとなってしまった．図は乱後200年を経ているだけに，一揆軍への憎しみは昇華され，老女は，一揆軍のシンボルとして図らずも先駆巫女＝聖女性を持って描かれていることは否定できない．

4）マクベスと魔女

シェークスピアの「マクベス」の冒頭に，戦場に向うマクベスの未来を予言する3人の魔女がでてくる．シェークスピアは魔女の姿についてなにも書いていないが，ロマン・ポランスキー監督は，映画「マクベス」（1971年）を，3人の魔女がマクベスとバンクォーにいきなり尻まくりをする，という衝撃的なカットから始めている．この映像表現が，ポランスキー監督の単なる思いつきでない事は明らかである．

5）ジャンヌ・ダルク

ジャンヌ・ダルクは張目吐舌も尻出しもした訳ではない．しかしにもかかわらず，イギリスの支配に抵抗するフランスの民族戦争のシンボルとして，先駆巫女の役割を果たした．

注目すべきはその聖女化と図像化の過程である[34,35]．15世紀に実在したジャンヌ・ダルクは19世紀以後聖女化され，フランス　ナショナリズムのシンボルとなって行く．現在はカトリックの聖人であるが，あと2000年ぐらい早く生まれていたら，先駆巫女から昇格して，今頃は女神となっていたかも知れない．

6）自由の女神

自由の女神の具象化で有名なものといえば，ニューヨークの自由の女神像と，ドラクロワの「民衆を率いる自由の女神」だろう．フランス革命はそれまでの王朝の交替という貴族や職業軍人の争いの枠を超えて，パリの民衆を政治と戦争の場に引き出さずにおかないものであった．その過程で武器をとって革命に参加する女性達も現われた．その姿は革命期に描かれた絵画に登場する．好意的に描かれたものばかりではないが，革命側の絵画には，早くから理想化された女神像として描かれている[36]．それも女神像はギリシャ神話からモチーフを借りて，兜を被ったアテナ風に描かれたものが多い．ジャンヌ・ダルクの伝統があるフランスならではの，宣伝のイメージ　シンボルである．

ドラクロワの「民衆を率いる自由の女神」は，1830年，7月革命のバリケード戦をモデルにしている．自由の女神はすでにギリシャ神話から脱却して理想化されたフランス女性として描かれ，しかも尻出しならぬ乳出しをしている．フランス革命の先駆巫女的イメージ　シンボルとして一つの極致を示す．それにしてもドラクロワが，戦場の巫女としての自由の女神を，なぜ乳出しに描いたかは実に深い意味を持っているといえよう．

次にもう一つだけ興味深い絵を紹介しておこう．「オーストリア皇帝軍を壊走させた女たち」のタイトルで『絵で見るフランス革命』[37]に紹介されている尻出し女達である．解説は「女性活動家たちを侮辱する反革命的なカリカチュア」とするが，本稿で論じているように，画家の意図はともかく，数千年の時空を超えた原初的戦争形態が復活していると見るべきであろう．すなわち恐らくオーストリア皇帝軍に対して，フランス革命軍に従軍していた一部の女性達が，このような尻出し行為を実際に行う場面があったに違いない．このことは古層ヨーロッパの伝統のようで，大和岩雄氏は『魔女はなぜ人を喰うか』[15]のなかで，先に述べたシーラ・ナ・ギグのほかに，12世紀ミラノのトサ門上の性器出し石像，フランス，イタリアなどの尻出し例を引用しつつ，邪視（張目）への辟邪の手段として女性の陰部出しが行われたことを紹介している．またキャサリン・ブラックリッジとハンス・ペーター・デュルがその著書[38,39]のなかで，本稿に紹介し漏らした尻出し事例について報告しているので参照されたい．

7）現代の先駆巫女

現代においては張目，吐舌の持つ意味が変容し，単純な敵意の表明の意味だけではなくなった．尻出しも威嚇の意味が失われ，性的な意味の方が強くなった．今日では，張目，吐舌，尻出しといったしぐさによる戦闘行動，そして先駆巫女は滅んでしまったのだろうか．戦場では滅んだといえる．しかし形を変えて，政治の世界，スポーツの世界にはまだ生きている．政治的運動や主張の場では，半分冗談をまじえながらも尻出し行動がマスメディアを通して報道されることがある．ピーター・コレットはドイツの反原発運動家たちが尻出しによってその主張をアピールする写真をその著書に飾っている[40]．現代の先駆巫女はどうだろうか．どの国でも政治的危機の時代には，そしてそれが暴力をともなうものであればあるほど，政治運動の先頭にたつシンボルとして，女性が立ち現われる．もっといえば先駆巫女が現われない時は，政治的危機の時ではないのである．しかもその政治的危機は必ずしも政治的変革とは一致しない．自由の女神はフランス革命を勝利に導いたのか，それとも単にパリ市民の平穏なくらしを守ろうとしただけなのか．誰かが政治運動のシンボルとして先駆巫女を意図的に作り出そうと思っても出来ることではない．その試みは失敗に終わるだろう．

一方スポーツの世界はどうだろう．スポーツ自体，オリンピック競技の起源をみれば分るように，政治性，祭祀性を持っているから，競技者たちが図らずも国や地域や集団の先駆巫女的役割をはたしている事は疑いようがない．では張目吐舌はそして尻出しは見られるのだろうか．

少くとも張目，吐舌は頻繁に見られる．尻出しも形を変えて行われている．そもそも多くのスポーツ競技自体，裸体に近い衣裳で闘われる．筆者は九州の田舎の人間であるが，九州の結婚式ではなぜか新郎の友人たちが裸になって騒ぐ事が多い．さすがに下着はつけているが……．ヒトは結婚式，いや闘う時なぜ裸になるのか．ブルース・リーや高倉健は殴り込みの時，なぜ上衣を脱ぎ捨てるのか．常識的に考えるとむしろ危険が増す行動をなぜ敢えて行うのだろう．あるいは初期農耕社会での戦争の記憶が甦るのだろうか．謎は深い．

3．舌出しと尻出しの意味

目を見開いた張目と舌出しを張目吐舌という．いわゆる「あっかんべー」とは多少意味が違うが，同一とみなされることもある．「あっかんべー」は子どもの喧嘩の表情であるが，実は子どもが自然に示す表情ではない．幼児が嫌いな人に対して見せるのは「べー」である．舌出しはするが，目は細められている．少し大きくなると，誰に教えられたのか瞼を裏返して赤い粘膜を出しながら「あっかんべー」ができるようになる．最近の子どもは教える人がいないのか，「あっかんべー」を見ることは少なくなった．舌出しの意味は威嚇の表情として使われているうちは比較的単純なのだが，今日では様々な使われ方をして実に複雑となった．舌出しの意味を深く追求することは別な機会にするとして，ここではこの「あっかんべー」にしぼって考えてみたい．

「あっかんべー」には相手の気合いをはずす意味があると思われる．例えば相撲でみると，一瞬の気合いが大事である．「待った」をされると，された方が負ける確率が高い．ここでいう「気合い」はどう現れるかというと，相手を「睨む」という表情が第一である．邪視＝張目がこれにあたる．「あっかんべー」は一瞬にしてこの気合いを外す力がある．

先日「いじめ」に関するテレビ番組を見ていた所，興味深い話をしていた．いじめが問題となったカナダの7～8歳の小学生グループへのインタビューだった．いじめの手段は，睨みつけることと，言葉による攻撃が手法であるという．カメラが彼らの姿を追っていたが，仲良く遊んでいるとしか見えない．ところがマイクで録音してみると確かに激しい「いじめ」が確認できる．たとえ暴力的手段に訴えなくとも，相手を屈服させ，支配下におく方法を子ども達は学んでいくようだ．ただそれは自然に覚えるものではなく，大人達から学ぶとコメントされていた．

初期農耕社会における村と村の戦争においても，暴力による対決に到る前にこの邪視と悪口，呪詛が前哨戦として戦われただろう．邪視は睨みつけそのものであるが，悪口，呪詛のシンボルとして舌出しが意味ある表情となったのではなかろうか．舌は言葉を発する器官の代表と考えられたのだろう．いわば「お前らを殺してやるぞ」という魂の表象の役を舌に込めたのだろう．かくして張目吐舌は，最大の敵意を示す表情となったのであった．

次に尻出しであるが，実は後期旧石器時代の遺跡から裸のヴィーナス像と呼ばれる，裸体の女性や女性器をシンボライズした石像や壁画，レリーフなどが数多く出土している．我が国でも縄文時代の土偶に同様のものがある．これらの造形物は豊饒のシンボルと見做されている．これに対して筆者が注目している初期農耕社会に発生した尻出しは，本稿でみてきたように，村と村との争いのレベルで最も盛んに出現したと考えられる．豊饒のシンボルとしての性器出し表現とどこが違うかというと，豊饒のシンボルでは乳房や女性器だけが単独で強調されているのに対し，本稿で取り上げた尻出しは，張目や吐舌とセットになっている点である．単独では豊饒のシンボルなのに，張目吐舌と重複することによって最も激しい敵意の表現となったのである．それは初期農耕社会の戦場に強力な武器の一つとして出現し，専制的国家体制への移行にともなって消滅した．それ以後は仮面劇や民俗文化として僅かに残渣を留めている．

また張目吐舌を併なわない単独の尻出しは後世，性的意味の外に，通常でないことを示すシンボルとしても用いられた．一例だけあげておくと，マルヴィン・リングの大著『歯科医学の歴史』[41]に掲載された，15世紀の聖アポロニア劇を描いた絵画に登場する道化である．道化はパンツをおろして尻出しをしている．この尻出しは，もちろん侮辱の意味が含まれるのに，誰からも咎められてはいない．ヨーロッパ中世の道化にはこのような行為が許されていた点が興味深い．

4．原初的戦争形態の考察

1）西安留学生寸劇事件

2003年10月29日，中国西安市，西北大学の文化祭で日本人留学生らが演じた寸劇が発端になり，大規模な反日デモが起きた．報道によると留学生らは「胸に赤いブラジャー，下腹部に紙コップをつけて踊り，ブラジャーから紙くずを出し観客席にまいた．」という．これを侮辱されたととった中国人学生らが謝罪を求めて連日デモを行うという騒動に発展した．興味深いことに報道写真に

よると，デモ学生の一部は晩秋にもかかわらず上半身裸になっていた．

この事件は日中間の歴史的な問題とともに，本稿で論じている尻出しの意味について考えさせられるものである．後日の報道によると日本人学生らはTシャツの上からブラジャーを着けており，全裸という訳ではなかったようだが，裸を曝すという行為が，戦場での戦闘行動の一部をなしていた，古代の深層心理に直接触れてしまったのだ．男であれ，女であれ，戦場で性を連想させる行為はそれ自体挑発的戦闘行動なのである．

もう一例あげておくと，最近福岡県大牟田市で騒音を注意した警官に対し，尻出しをした男が逮捕された，という新聞記事に接した．これなど罪名は公然猥褻物なんとか罪なのだろうけれど，尻出し行為の意味は明らかに警官に対する挑発的侮辱である．

2）英雄の誕生

古代の戦場において戦士や巫女が陰部をさらすことは今日考える程には，驚くことではなかった．敵の戦士に対する先駆巫女からの最大の侮辱のメッセージは「お前らは，女のここ（陰部）から生まれたくせに偉そうにするな」であった．多くの敵を殺して来た，怖いものなしの若き戦士たちにとって，女性の陰部から生まれたという事は，彼らのプライドを深く傷つけるものであったろう．世界中に見られる成人式のイニシエーションは，英雄（男）が，女の陰部から生まれた事を否定し，いや否定できないので，一度死に，生まれ変わって女の陰部から生まれたのではない，真の戦士＝再生族であることを，意識の上で確認するものであった．ではなぜこれ程までに心理的な説明ないし，納得が若き戦士たちに必要だったのだろうか．おそらく戦場ではわずかな勢いの差が勝敗を決しただろう．戦場での激しい興奮は男根の勃起さえも招くものだった．戦士たちは裸になり，呼び，男根を勃起させていた．この敵の勢いを削ぐには，母親と同年代の女性の陰部出しは最も効果的であったろう．若き戦士たちはパプアのキワイ族にみるように，極めてナーバスになっていた．僅かな侮辱によって気が萎えてしまったのである．この戦意の萎えは戦局の動向に致命的だった．戦争に勝つにはここを心理的に打ち破らねばならなかった．

ノイマンは『意識の起源史』[20]に次のように述べている．「ユングは英雄の近親相姦が彼の再生を目的とすること，英雄は二度生まれることによって初めて英雄となること，また逆に二度生まれた者はすべて英雄とみなすべきことを証明している．」（上：219ページ）．つまり英雄（男）の条件を，母親から生まれたことを意識のうえで否定できるもの，としているのである．戦場での尻出しに心理的に耐え得るものこそ英雄（男）という訳である．

3）古代の戦闘形態

これまで色々な事例を検討することによって古代の戦闘形態についてのイメージを持つことができたと思うが，もう一度ひと纏めにして考察してみよう．

初期農耕社会における村と村との戦争はどのようなものだったのだろう．戦争は恐らく，日にちと場所を定めて行われた．といってもせいぜい「じゃ明日」といった約束だろう．その日両軍が戦場に到着．まず双方の先駆巫女団が相手側を威嚇，侮辱，呪詛するといった激しい言葉のやりとりがあって両軍が罵りあう．当然，張目吐舌，尻出しが行われる．相手の言葉に怒った一方の戦士が初め矢（忌矢：いはひや）を放ち，双方矢軍となる．石を投げる者もいる．勢のない方，動揺した方が逃げ始めると勝負がついて，負けた方は潰走し，勝った側が剣，槍，棍棒で逃げ遅れた敵側を殺戮するというパターンだったろう[42]．この戦争形態は先駆巫女を除けば基本的にずっと続いたらしく，鈴木眞哉氏は『鉄砲と日本人』[43]で，源平時代から戦国時代においても戦場の勝敗は接近戦ではなく，弓矢や鉄砲を用いた遠戦で決したとしている．

先年亡くなった佐原真氏は農耕の始まりが，戦争による大量殺戮の始まりともなった，との戦争起源論を展開している[44]．佐原氏は戦争を「多数の殺傷をともない得る集団間の武力衝突」と定義している．これで問題ないと思うが，一つ気になるのは，争う二つの武装集団はなかなか衝突に到らないことである．殺人が人間の本能ではないとの視点に立つ限り，筆者もそう思うが，なんの理由もなく見ず知らずの他人を殺せるものではない．お互いに集団的共同殺意を形成しなければ衝突は起り難い．いかに集団的殺意を醸成するかは戦争指導者の頭の痛い所である．呪詛，悪口，侮辱に

よって敵を挑発し，叱咤激励して自集団を攻撃に狩り立てねばならない．本稿にみる張目吐舌，尻出しは，すべてこの敵を挑発する手段として用いられた．筆者はこの点を勘案して，先の戦争の定義には，集団的共同殺意の形成，が盛り込まれねばならない，と思うがどうだろう．

4）なぜ先駆巫女は滅んだか

牧畜を含む初期農耕社会において一般的であった先駆巫女は，その後の専制王権国家体制の確立とともに滅んで行く運命にあった．そして最高位の巫女は神格化が進み，アマテラスやアテナのように神となるものが現われた．一方，多数の下級巫女は零落し，そのまま村の巫女として残ったのはいい方で，ゴルゴン姉妹や，魔女，ヨモツ醜女，山姥などのように，悪いイメージを張り付けられてしまった．古代の戦場で，あれ程活躍した先駆巫女団はなぜ滅んでしまったのだろうか．その原因の第一はやはり戦争形態の変化である．戦場における常備軍の出現で，戦争形態は一大変化をとげた．

初期農耕社会における戦争は村をあげて行われた．戦争の原因が農耕の不安定性にある以上，農耕の安定の妨げになることは戦争の原因となった．例えばスサノオがやったように「田の畔離ち，その溝埋み」のような行為は十分戦争の理由となったろう．更に凶作が重なって，より深刻となった，年周期の飢餓戦争は皆殺し戦争とならざるを得なかった．この時，基本的に負けた方の奴隷化はあり得ない．必要なのは今，目の前にある食料だった．奴隷を養う余裕はなかっただろう．環濠を巡らした村は，運命共同体だった．男も女もなく戦争に参加せざるを得なかった．先駆巫女はその戦争のなかで生まれたといってよいだろう．村々の生産力が高まりクニが生まれる頃になっても，先駆巫女は職業化しながら生き残っていたが，常備軍の出現は男軍，女軍の項でみたようにもはや先駆巫女を必要としなくなっていた．専制国家は常備軍を抱えることになった．常備軍は村々の間に平和をもたらしたが，一方で常備軍は，独自の法則によって成長して行かざるを得ない．すなわち常備軍は戦時ではなく平和時に増大するという，常備軍のパラドックスに陥っていく．その流れは今でも決して変わっていない．

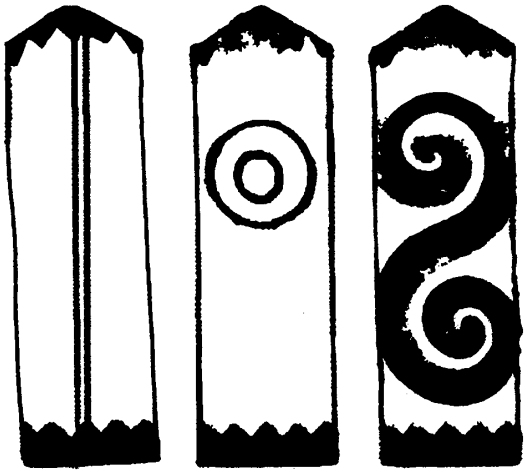
あとがき

最後に本稿を読んで，尻出しの威力が信じられない，という人のために筆者の体験を記しておこう．40年以上昔，今からは考え難いことだが，便所は男女共用が多かった．学生だった筆者は，用を足そうとアパートの薄暗い廊下の涯にある，共同便所の扉を開けた．なんと筆者の目に飛び込んできたのは，こちらに向けられた巨大で真っ白な尻だった．顔見知りのおばちゃんが鍵をかけずに用を足していたのである．ショックはその後だった．おばちゃんは「キャッ」とでもいってくれればよかったのだが，なんと「アーハッハッハー」と大笑すると，慌てることもなく悠然とその場を立ち去ったのであった．筆者は呆然自失．その時のトラウマを癒すため，本論を執筆した次第．

文献と注

1) 竹原直道：地獄絵にみる抜舌図について．日本歯医史会誌 25：21-32，2003.
2) 竹原直道：「正法念処経」が描く抜歯・抜舌について．日本歯医史会誌 25：222-229，2004.
3) 青木和夫ほか校注：日本思想大系 1 古事記．岩波書店，東京，1982.
なお，以下記紀からの引用を行うが，記紀は天武朝官僚の作文といわれており，分析資料として耐え得るか，という問題に答えておきたい．もし記紀が天武朝官僚の作文だとしても，官僚が創作などするはずがないから，原資料の張り替えと改竄が彼らの仕事だろう．ということは，記紀には全くの創作部分はあり得ず，それなりに原資料の面影が残っていると考えるべきである．だからこそ，今日に到るまで原資料復原の試みが絶えないともいえるのである．
4) 坂本太郎ほか校注：日本書紀．岩波書店，東京，1994.
5) 吉野裕子氏は『蛇―日本の蛇信仰』講談社，東京，1999. においてこの場面のアカカガチ（ホウヅキ）を大蛇の名称とし，ホウヅキの実莢（みざや）の形を赤蝮の三角形の頭部に似ているとしているが，これでは「あっかんべー」によって眼が赤いということが見えてこない．やはり，「目はホウヅキの実のように赤い」ととるべきだろう．
6) 鎌田東二：ウズメとサルタヒコの神話学．大和書房，東京，2000.
7) 大系本『日本書紀』の注は口尻を口と尻とするが，それでも吐舌と尻出しの意にとれる．
8) 高見　剛，高見乾司：九州の民族仮面．鉱脈社，宮崎，2003.
9) 亀井正道：日本の美術　第 346 号　人物・動物はにわ．至文堂，東京，1995.
10) 山上伊豆母：巫女の歴史―日本宗教の母胎．雄山閣出版，東京，1980.

11) 川村邦光：ヒミコの系譜と祭祀―日本シャーマニズムの古代―．学生社，東京，2005.
12) 前掲した吉野氏の著書5）によると，シタテル姫の兄とされるアヂスキタカヒコネは雷神であり，蛇神でもあるという．蛇の舌は雷の稲光のメタファーと考えられるから，雷神の妹の名が舌照姫でもおかしくない．
13) 飯島吉晴氏の『一つ目小僧と瓢箪』新曜社，東京，2001．によるとたたら製鉄の中心となる土炉をホドというらしい．そうだとするとイスケヨリヒメは，ホドとタタラが付くことによって，製鉄に関係した巫女ということになる．ここでは一応タタラを皮製のふいごと考えたが，本当にそうだろうか．「ふいご」使用の証拠は古墳時代中期までないとされる．窪田蔵郎氏は『鉄から読む日本の歴史』講談社，東京，2003．で「弥生期より古墳期ごろまでの製鉄は，山あいの沢のような場所で自然通風に依存して天候のよい日を選び，砂鉄を集積したうえで何日も薪を燃やしつづけ，ごく粗雑な鉧塊（けらかい：還元鉄）を造っていた．」とする．記紀に用いられる「たたら」は「多々良」または「蹈鞴」の字をあてている．蹈鞴は大型のふいごのことだから「ふいご」姫ということになってしまった．しかし窪田氏によると製鉄従事者は，俘囚とか穢人と呼ばれる人々を含み，隷属民扱いで冷遇されていたという．そのような名称を最高位巫女の名として用いるだろうか．
　一般に記紀の人名はあて字が多い．そこでこの「たたら」もあて字と考えるとどうなるか．ちなみに今井泰男氏は「たたら」語義の説明に苦しんでいるが（今井泰男：『「たたら」語義の研究』銀河書房，長野，1984.），「たたら」にはふいご以外の意味がある，と考えた方が楽になるのではないか．「たたら」は製鉄と無関係だとするとどうなるか．「たた」は楯の古形で，『古事記』にも用いられている．「ら」は大辞泉によると，名詞に付いて語調を整える，または人を表す名詞について謙遜または蔑視の意を表す．古くは愛称としての用法ともなる接尾語であるという．
　そこでセヤタタラヒメの名を考えてみよう．大系本注はセヤ＝ソヤを金属の矢じりの矢とするので，セ矢楯のヒメとなる．ホトタタライススキヒメは，ホト楯のヒメミコとなる．矢印の入った楯のヒメ，ホト（女陰）印の入った楯のヒメのことであろうか．本稿でみたように矢もホトも戦場での強力な武器だから，この母娘の楯シリーズの名称は十分な意味があることになる．いずれも女軍を率いる最高位先駆巫女の名として実にふさわしいではないか．埴輪には様々な文様入りの楯を持った武人像が多数出土していることも傍証となろう[9]．図に考えられる楯の文様の例を示す．
　これらの文様はまったく根拠がないという訳ではない．最近奈良県広陵町巣山古墳から出土した木棺には同心円の文様が描かれていた．同心円は例えば太陽よりもホトの可能性があると考えるが如何だろう．ちなみに隼人の楯のうず巻は蛇と思われる．
14) ジョン・シャーキー：イメージの博物誌18　ミステリアス・ケルト．平凡社，東京，1992.
15) 大和岩雄：魔女はなぜ人を喰うか．大和書房，東京，1996.
16) 山本忠尚：舌出し獣面考．奈良国立文化財研究所学報35：89-149，1979.
17) 外間守善，西郷信綱校注：日本思想大系18　おもろそうし．岩波書店，東京，1972.
18) 谷川健一：うたと日本人．講談社，東京，2000.
19) 蔵持不三也監修：図説ヨーロッパ怪物文化誌事典．原書房，東京，2005.
20) エーリッヒ・ノイマン：意識の起源史．林道義訳．紀伊國屋書店，東京，1984.
21) 松島道也，岡部紘三：図説ギリシア神話―英雄たちの世界篇．河出書房新社，東京，2002.
22) ロジェ・カイヨワ：メドゥーサと仲間たち．思索社，東京，1975.
23) 今のところ筆者は，カーリー神の造形例に古いものを見い出せていないので，カーリー神の出自がゴルゴンかどうか結論は出せない．
24) 松村一男：女神の神話学―処女母神の誕生．平凡社，東京，1999.
25) 和田　清ほか編訳：魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・随書倭国伝．岩波書店，東京，1956.
26) 増田義郎：アステカとインカ―黄金帝国の滅亡．小学館，東京，2002．より孫引き．
27) リチャード・タウンゼント：アステカ文明．創元社，大阪，2004.
28) ハリー・オースティン・イーグルハート：女神のこころ．現代思潮新社，東京，2000.
29) 稲畑耕一郎：神と人との交響楽．農山漁村文化協会，東京，2003，125ページ．
30) 金関丈夫：木馬と石牛．岩波書店，東京，1996.
31) クロード・レヴィ・ストロース：構造人類学．みすず書房，東京，1980.
32) 佐藤謙三校註：平家物語．角川書店，東京，1959.
33) 桑田忠親ら編：戦国合戦絵屏風集成第5巻，島原の乱図，戦国合戦図．中央公論社，東京，1988.
34) 高山一彦：ジャンヌ・ダルク．岩波書店，東京，2005.
35) レジーヌ・ペルヌー：奇跡の少女ジャンヌ・ダルク．創元社，東京，2002.
36) 小井高志編訳：世界を創った人びと22 ロベスピエール．平凡社，東京，1979.



A　　B　　C

A：セヤタタラヒメの楯（想像）
B：ホトタタラヒメの楯（想像）
C：隼人の楯（実在）

37) 多木浩二：絵で見るフランス革命―イメージの政治学．岩波書店，東京，1989.
38) キャサリン・ブラックリッジ：ヴァギナ―女性器の文化史．河出書房新社，東京，2005.
39) ハンス・ペーター・デュル：性と暴力の文化史，新装版．法政大学出版局，東京，2006.
40) ピーター・コレット：ヨーロッパ人の奇妙なしぐさ．草思社，東京，1996.
41) マルヴィン・リング：図説歯科医学の歴史．西村書店，新潟，1991.
42) 弥生時代中期に激しい戦争があったことは分かっているが，当時の墳墓から出土する人骨に残る戦争の痕跡は少ない．我が国は酸性土壌で人骨が残り難いうえに，矢戦中心であるから致命傷であっても骨には痕跡を残さない．鉄鏃は腐食して失われた．そのなかで橋口達也氏は北九州の戦死者の埋葬例を「弥生時代の戦い」（橋口達也：弥生文化論．雄山閣，東京，1999.）にまとめた．例は少ないが，石剣や銅剣，鉄鏃が嵌入した骨の存在が報告されている．明らかに背後から刺されたものがある．
43) 鈴木眞哉：鉄砲と日本人．筑摩書房，東京，2000.
44) 金関恕，春成秀爾編：佐原真の仕事 4　戦争の考古学．岩波書店，東京，2005.

著者への連絡先：竹原直道
〒 803-8580
北九州市小倉北区真鶴 2-6-1
九州歯科大学保健医療フロンティア科学分野
Tel 093-582-1131（内線）2103